

るをえない。

チャップレットのような不信心な男が急に神を崇めはじめると、神の存在を愚弄し否定しているかに見えるが、そうではない。彼はいぜんとして神の大きな掌たねこころの中にいるのであり、かえって彼は自分の嘘を見抜けない聖職者の方を皮肉っているのではあるまいか。

悪人正機と機知

さてチャップレットは立派に懺悔を行なったあと最後の塗油式もすませて、晩鐘も鳴り終わる頃に静かに息を引きとる。修道士は盛大な葬儀を取り行ない、亡骸は大理石の柩に入れられて礼拝堂の中にうやうやしく埋葬される。翌日からは早くも人びとが列をつくってお参りをはじめ。チャップレットは聖者の列に加わるのであるが、おおかたの人は彼こそ、天国よりもむしろ悪魔の手のうちに転落すべき男だと思ってしまうであろう。しかし神はそのようには考えない。

何ごとにも曇らぬ目をしたあの方は、祈りをあげた者の無知や祈られた者の追放されるべき罪よりも祈りの純真さをよしとされ、あたかもその面前で追放されたはずの者が祝福されるべき者であるかのように、人びとの祈りを聞き届けられたのです。

つまり、神の宏大無辺な慈愛は人間の過ちに向けられるのではなく、信仰（祈り）の純粹さに向けられるのである。生前どんなに罪深いことをしても、臨終の際に純粹な信仰告白をすれば、神は救ってくれるのである。ここには、親鸞が『歎異抄』で説いた「悪人正機」が垣間見られる。

この物語は、高利貸しである兄弟、嘘の懺悔をするチャップレット、それをまじめに受け容れる有徳の修道士が、それぞれ自分に与えられた役割を分別を以て実行している。ここからこの話のまじめさ、平静さが顕われている、戯画化をまぬがれている。ユーモアが全編に漂っており、微笑を生む静けささえ感じられる。

世俗化が進せられつつあったとは言え、ルネサンス期はまだキリスト教の支配下にある。この物語も、悪徳商人の生きざまと懺悔とを生き生きと描き、神の慈愛の深さを充分に表出することによって、時代の文化的雰囲気、聖職者への批判も交えながら、活写していると言えるであろう。

そしてこの主人公が苦境からどうやって脱け出されたか、それはチャップレットの持っていた「機知」のおかげだと指摘できるであろう。

難関を前にしていかにそれを乗り越えられるか——これを自分の裡に秘めた、第1章の修道士と貴婦人の説話の例にもあるように、神がかりではない人間の持つ才知・才覚で処理していく。その能力がエスプリつまり機知なのである。

2 知の形

イタリヤ・ルネサンス後期に活躍した医師・数学者・哲学者・占星術者ジェローラモ・カルダノが抱いた知の概念を、ルネサンス期の知の概念の変遷の中で捉えてみよう。

カルダノには『叢智について』(De Sapientia)という著書があるが、ここではこれは参考程度に留め、カルダノの『自伝』(De propria vita)の中に顕われた知についての考え方をさぐっていくつもりである。というのは彼の『自伝』の中に表現されたさまざまな知を考察していくことで、できればカルダノの生活意識と知の關係にまで話が進展すれば幸いと思っている。

ルネサンス期の知の形

カルダーノの知の概念の分析に入るまえにルネサンス期一般にあてはまる三種類の知の特徴について触れておきたい。

第一に挙げられるのは知の世俗化、人文主義的知である。

すでに述べたように中世の観想的な知、机上の学問としての知から役に立つ知、つまり実践的な学問知・医学的知、世俗的教訓の集成への移行である。賢明になるために人間は何を知らなければならぬかという提題を前時代のものとすれば、ルネサンス期では何をしなければならぬかを思ったのである。

知の源泉は神から人間あるいは自然へと移り、日常生活、社会生活を円滑になしうる道徳律であったり、長命や健康、政治生活や職業上の成功を司るものへとなっていく。これは古代ローマのキケロの抱いた知の概念と同類のものであり、結局は古代知を糧に世俗活動重視の理想的市民生活を形成しうるものが知となり、その知を最大限活用してこそ生きる意義もまた見出されたわけである。

生活上の知がこうした処世術をめあてにしたものであったことから学的な知も実践的な、功利的な知が重んぜられた。

知ある人間は隠遁などせず市民生活に積極的にたずさわるべきであって、そうした人びとは百科全書的知が要求された。

以上の知を特に提唱し自ら実践したのは十五世紀のフィレンツェ人文主義の人たちであった。

その中のひとりレオナルド・ブルーニが分類した知を挙げてみよう。

sapientia (叡智) / scientia (学) /
prudentia (思慮) / intelligentia (知性) /
ars (技術)

であり、叡智とは学と知性とが混り合ったものとされている。これはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』での分類と酷似している。

しかしこうした知の概念はフィレンツェとヴェネツィア、時代的には十五世紀の最初の四分の三世紀までに限られていたことをつけ加えておく。

ここで少し紙幅をさいてイタリアに於ける人文主義の変遷の歴史を辿ってみよう。

第一期(一三七〇年が頂点)は人文主義の祖といわれるペトラルカが活躍した時代である。ペトラルカの人文主義の特徴は、知性的、高踏的、環境に左右されない自由と独立の尊厳と言われ、今日の個人主義や自由主義にわりと近いものであった。孤立した天才と呼ばれるペトラルカにとっては個人主義が最も重要な問題で、そのため市民意識は比較的希薄で何事につけ極端を好まない傾向にあった。つまり社会的ではない点に限界であった。またこの時期は、学問をするのには別個に経済力が必要で、学者の数こそ非常に少ないが増えていく傾向にあった。

第二期(十四世紀末—一四五〇年)。この時期の特徴は市民としていかに生きるか、共和国としていかにあるべきかが問題であった。つまり第一期とちがって社会との結びつきが肝要とされた。

フィレンツェ出身者が半島全域に行き渡り、初期資本主義(コムーネ時代)から数えて三代目にあたる人たちが実益の世界をのがれて、観念、学問の世界へと走り、知識社会とでも呼べるような一種のグループを形成した。ここにはじめて、ルネサンス期において階級としての知識階級が成立した。ルネサンスの推進者が社会の装飾品均立場から必需品と化したわけなのである。

さらに社会との結びつきが強化した点では、十四世紀中葉から国家の立場が変化したことが挙げられるであろう。つまり、中世にあっては國務が未分化の状態、素人の貴族や市民が政務を担当していた。一方、ルネサンス期になると國務が複雑化して、条約・条列文などに用いる書類作成の必要が生じ、政治の専門家（官僚）が重要になってきた。こうなるに人びとは新しいタイプの事務官としての人文主義者に注目しはじめた。

さてここで、なぜ市民、共和国としての意識が芽吹いてくるかを考えてみよう。つまり、市民的人文主義者（*Humanistic Civilis*）の発露についてである。

十四世紀のイタリアは独立国が乱立しており、それぞれ君主国と共和国が対立の状態にあった（北部・中部のコムニネ制が解体して、各地のシニョーレたちが争った）。その中において、フィレンツェとミラノの二大勢力の抗争が市民的人文主義者を生み出す契機であった。

つまり、共和主義者たるキケロを賞揚するフィレンツェは、市民・共和国の自由を守るために積極的に働くことを称賛した。これに対して、カエサルを賞揚するミラノは、ジャンガレッツォ・ヴィスコンティの許に、フィレンツェの周辺である、ピサ、シエナ、ボローニャ、ペルージャを占領して、イタリア統一運動を押し進めた。フィレンツェはミラノの脅威の許で共和主義を守るため、市民の愛国心をあおった。これは市民の日常活動、とりわけ政治活動への参加を重視するもので、ここに市民的人文主義者が誕生した。また、フィレンツェの人文主義者（サルタステイ、ブルーニ）の仕事は、愛国心高揚のためフィレンツェ史を執筆することであった。しかしこの場合の市民とは依然として、伝統的支配層である上層市民に限られていたが、第二期の人文主義の特徴をここで一応まとめよう。

一つは、第一期に比べて市民的、実際の、日常的、現実的であること。
一つは、国家が人文主義（者）を優遇したこと。たとえば、フィレンツェにおいて人文主義者は国家で最高の地位を得ていた。この背景には、第一期の人文主義者が個人の道楽であったのに反し、第二期では人文主義者が職業化して、はじめて知識階級が知識を生活の糧にしたことが挙げられる。

一つは、全イタリアに人文主義が普及したこと。これは人材の乏しい小国家ほど文化政策に力を入れたためである。人文主義者は国家の装飾、有力な武器となり、待遇がよいため小国へと渡った。その結果としてフィレンツェの文化が全国すみずみまで行き渡り、十五世紀の初めにはイタリアの文化的統一が成った。俗な言い方をすれば、人文主義者は金さえもらえれば他国であっても任に就き、他国の歴史を美化して書いた。結局、知識人にコスモポリタンの傾向が出て、祖国愛が希薄になったのである。

第二期末期。この期の特徴は、人文主義者の就職難の時代と言えるであろう。家柄や地位に恵まれぬ者たちは長い修業時代を経るが、国内に職がないために国外へ流出するようになる。たとえば、ボッジョ・ブラッチョリニはイギリスへ、後のピウス二世であるエネア・シルヴィオ・ピッコロミニはドイツへと渡っている。

第三期（十五世紀後半）。この期は人文主義者の地位の低下現象が特徴として挙げられる。

一四五〇年代は、ナポリ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノ、ローマ教会領といった五大勢力の安定期であった。一四五三年ローディの和約の成立後は五大勢力が妥協し合って、現状維持のまま国内体制（国家権力）が強化された。

フィレンツェは大ロレンツォの専制政治の時代で、個人や共和国の自由はタブー、また歴史や政治もタブーで、哲学や文学（文法論）や美学へと志向が強まった。フィッチノやポリツィアーノ等が輩出した。ナポリやミラノでは、人文主義者は道化師同様に扱われ、国家の下僕と化した。

第三期の特徴を具体的に次にまとめてみよう。

一つは、抽象論、芸術（学問）至上主義へと向かう傾向が強まったこと。また現体制を肯定する御用学者も増えたことである。この期の人文主義者の中には、外見はパトロンに服従しても、陰では批判するような者もいたが、現実にはどうにもできなかった。つまり宮廷以外に生活する場がなく、パトロンを失うことは死を意味して

いた。

一つは、当初よりはじまっていた俗物化。つまり御用学者化。権力に屈従することによって、後輩の進歩を妨げた。その結果として文化の向上が望めなくなり、十五世紀後半から十六世紀初めまで、ルネサンス文化の停滞期となった。これは人文主義者の限界が出てきたためで、権力者と知識人が対立した結果、文化人の後退が余儀なくされたためでもある。

一つは、イタリアのパトロンが没落しはじめたために、人文主義者たちはイギリス、フランスなどの国外へ渡ったこと。イタリア国内の専制政治の中にいたために共和的性格が失われ、イタリア文化は同じ専制国家であるヨーロッパへ影響を与えた。これは十六世紀のイギリスやフランスのルネサンス開花の起因となった。

一つは、人文主義者の主な仕事がなくなってきたこと。彼らの仕事は古代の書物の写本を捜して編集し直すことであったが、写本が発見しつくされてしまい、また十五世紀末から出版技術の進歩にともない仕事がなくなってしまうわけである。人文主義者もっぱら出版社の編集者として雇われた。

第二の知の種類としては十五世紀後半フィレンツェに登場したフィチーノ、ピーコを中心としたプラトン・アカデミアに集まった人たちの抱いた知の概念がある。

彼らは人智における神性の能動的な役割と神的啓示の重要性を強調した。これは中世的な知の概念の繰り返しであり、さらにプロティノス、プロクロスの異教的神秘主義との直接的接触の賜物と言えよう。人間の叡智とは神の似像なのである。人間は賢明になることによって神に近づいていく。

もちろんこの時期にも第一に挙げた実践的知は生きつづけており、その期を市民的人文主義の時代と名づけられ、このプラトン・アカデミアの時期は文人的人文主義と呼ばれ、イタリア出身の知識人がヨーロッパ各地へと流出して文化の通俗化が起こった。初期の人文主義者の活躍した時代は都市国家間の争いがたえず、勢い政治的にならざるをえなかったが、この時代はローディの和（一四五四年）以後、後の人が黄金の時代と呼ぶに至る政治的には比較的平和な日々がつづく。とくにフィレンツェはメディチ家の保護の許に文化は興隆を迎える。しかしその反面非政治的、受け身的、隠遁的傾向を強めていく。

この黄金の時代も大ロレンツォ、フィチーノ、ピーコが死去し、サボナローラの神政が行なわれるに至って凋落の一步を辿ることになり、プラトン・アカデミアにも驕りが見えてくる。イタリアは外国勢力の侵入によって荒廃をよぎなくされ、十六世紀へと時代は新たな局面を迎えることになる。

第三に挙げられるのは北イタリア（とくにパドヴァ、ボローニャ）を中心として根づいたアリストテリズムの知の流れである。

フィレンツェの人文主義的ルネサンス文化とは異なり、大学では医学部（パドヴァ）、法学部（ボローニャ）があり、またアラブ世界からの影響もあって実学的気風が濃厚であった。したがって知とは実験や観察等の経験を尊重した経験知であった。レナルド・ダ・ヴィンチに「知識は経験の娘である」という言葉があるが、北イタリアの知を言い得ていると言えよう。十四世紀にペトラルカが当時の学問的主流であったこの北イタリアの自然科学や医学研究に反響を加えたことを想起されたい。このような風土からやがてガリレオが登場してくるが、カルダーノはガリレオより二世代ほど早い時期（十六世紀初頭）に北イタリアのパヴィアで生を受けている。

知を示す言葉

カルダーノの考えた知はこの三つのグループのすべてにわたっており、折衷的と言ってよいであろう。

三つのグループそれぞれに関するカルダーノの知を検討してゆくまに『自伝』中登場してくる知を表わしている言葉を検討してみると、*cognitio*（知識）もかなりあるが、*sapientia*（叡智）が大部分を占める。

さきのブルジョアの分類にあった思慮については『自伝』中一章(第十一章)がさかれている。そこに書かれていることは目的達成のための身の処し方であり、アリストテレスの言う「知慮(思慮)とは『人間にとっての諸般の善と悪に関しての、ことわりを具え真を失わない実践可能の状態』であるほかはない」に相当する。つまりよく生きるための方便なのである。

やゝ *sapientia, cognitio* のほかに数々少ないが *scientia, intellegentia* といった単語が使われている。

ここではルネサンス期の知の分類で試みた三つのグループの知の概念にそって検討していきたいと思う。アリストテレスやブルジョアの行なった厳密な分類をカルダーノは試みておらず、正確な分析は至難だからである。

処世の知——第一の知の系譜・徳

カルダーノが生まれたのは一五〇一年であるが、ピーター・パークによれば、この世代の人間の特徴は落ち着きがなく不安定で、世間に対して皮肉的なものの受けとめ方と暴力的なまでの拒絶のあいだを揺れ動いたとある。またカトリック精神の動揺のため精神的危機に陥っているともある。この期は初期人文主義者のように理想的市民生活をめざして都市共和国のために働くことに生きがいを見出せうる状況ではなかった。そういった政治体制ではなかったし、またかといって現実から逃避して神をひこり尊かに観想するには現実はあまりにも過酷で動きが激しかった。種々の疫病、飢饉、戦争、酷税といった社会的問題、さらに病弱、両親の不和、出自(カルダーノは私生児)といったカルダーノ個人の苦惱など、生きていく、生きのびていくということが人生の最初の試練のような時代であった。

このよりの社会にあってカルダーノも一市民にすぎないのであるが、市民としてのカルダーノの考え方はきわめて小市民的と言ってよいであろう。「われわれをとりまいていることはみな些細なことから成り立っている」と述べる人物に附随するイメージは、『自伝』の他の箇所からも推測されうるのだが、人間関係に苦勞し、つまらないことで悩む人間、裏を返してみればある意味で世事にたけた人間ではないだろうか。政治的であろうはずがなく、極言すればこうした発想はきわめて文学的であり、世の中の人情の表裏を知りつくしたモラリストの考え方である。

ごくつまらないことでも、いつも以上に繰り返り起こったりすると、ときにはそれを手がかりにものごとを推察すると理屈になっていることもある。ほかですでに言ったと思うが、一般に人事はすべて微細なことから成り立っていて、そこに要約されている。ちょうど網はたくさんの編み目からなっているし、水蒸気からいろいろの雲が発生するようなものだ。一見複雑なことも小さなことから始まる。逆に微細な部分に分けることも可能と考えなければならぬ。こうしたことが理解でき、自分の仕事をたえず確かめようとする人だけが、市民生活において技術と知恵の点で最もすぐれた人となり、その頂点を極めるであろう。どんな出来事であっても、こうした些細なことが等閑視されてはならないのだ。

引用文中の「知恵」は原語では *intellegentia* であるが文脈上このように訳出した。さてこれと初期人文主義時代のレオナルド・ブルジョアの見解とを比較してみたい。

人間生活を送り育てるための道徳教育のうちで、最高の位を占めるものは、何といても国家および政治に関するものである。何故ならこうした訓練は、すべての人間を幸福にすることを目的とするからである。たしかに一人の人間を幸福にすることもよいことに違いないが、国中のものを残らず幸福にすることはさらに素晴らしいことではないか。まことに善はあまねく行き渡れば渡るほど、神聖なことを思われる……

一統の許に判ると思われるが、カルダーノの意識といかに相違していることか。

『自伝』に幸福を論じた章はあり、また国家についても触れられている箇所もあるものの、幸福については「少なくとも生涯の一時期の仕合わせは全体との比較のうえで成立する」とか「自分の欲するものになりえないときには自分のなりうるものにわが身を合わせていけば幸福を得る可能性がある」とかいったきわめて妥当な見解を述べているが、積極性や活力を欠いた個人的な傾向の強い文である。国家についても「國をたたえねばならない理由などどこにもない。とりわけローマ人、カルタゴ人、スパルタ人、アテナイ人の主張した愛國主義を誇りとするには及ばない。彼らは愛國に名をかりて善良な民衆に邪悪な支配を課し、貧乏人には浪費の政治を敷いたのである。國家とは、非好戰的で、臆病な、なべて害のない人びとを抑圧する小さな専制君主の集まり以外のなものでもないのだ。ああ、人間の意地きたないことよ！ 祖國や来世のために死をも辞さない人間がいたなど信じられようか」とあり、國家に対して向日的な期待、國家のために働こうなどという意志は毛頭感じられない。「自由のために戦う都市や君主に同じとがを負わせたいとは思わない。君主のやりうることは正義を擁護し、善人を援助し、不幸なものを慰め、徳を涵養し、一族やすでに実権を得たものを優遇することであり、こうした仕事は彼らの名譽の唯一の褒賞なのである」と書いてはいるが、政治については虚無的な見方をしているようである。

このような発想をするカルダーノを責めようとはむろん思わない。むしろこうした少し斜に構えた、どこかしら皮肉とも取れるような彼の心根を知っておきたい。またブルニの時代とカルダーノの時代との根本的差違も強調しておきたい。ブルニの時代（十五世紀）にも戦いやペストはあったが、人びとの意識はまだ向上的・肯定的であった。カルダーノの時代は政治的にはデカダンスと言ってよい。

加えてカルダーノという人はその狷介な性格から対人關係に非常に氣を配った人である。病弱なことからも健康に留意した。それゆえ平凡な市民生活すら満足にできなかった人間が抱く処世の知恵というものが、いかにしうまく生きるかに集約するのは当然のことと考えられる。

人間の幸福は長生きすることであり、長生きするための生活術として知というものが考えられ、そうした知恵があれば、優良な健康が得られ不死の希望さえ望みうる。この不死の希望とは永遠の生命と同義であり、カルダーノの考える名声獲得の手段ともなるものである。名声（名譽）とは「豊富な知識、数々の旅行、危機、経験した職業、多くの依頼、諸侯との友情、名声、書物、治療や他の機会で示された非凡な才、わたしの中で確認された奇妙な、ほとんど超自然的な事柄。さらに守護靈と天啓による認識。加えてミラノをはじめパヴィアやロマの医学会員であったこと」であるが、けっきょくは精神的な長命のことであって長く人びとの心の中で生きつづけるものを示していると思われる。

したがって肉体的な面が長命、精神的な面が名声ということになり、この二つはカルダーノにとって徳を意味している。「徳とは「卓越性」の意義だが、その内実は時代によって異なって当然と言えよう。カルダーノにとっては彼の徳を維持していくことが知の核となったものと考えられる。

しかし長命・名声を希求する意識の底に短命への危機感、社会的地位への不安等が存在したことを忘れてはならない。

カルダーノの生活レベルにおける知とは、長命や名声という彼のいう徳であることに反駁はしないが、それがカルダーノ個人や社会情況に由来する生活意識の危機感より醸し出されたものであることを銘記したい。いかに長く善く生きる。——これこそ彼の金言であろう。必然的に倫理学、医学という学術的知識が尊いものになることが判る。言うまでもなくカルダーノは当代随一のモラリストであり内科医であった。

前項でフレンツェの人文主義者の抱いた知の概念の継承を述べてみたが、この項ではプラトン・アカデミア的な知の概念の影響を受けたカルダーノ像を追ってみよう。

教智こそが人間の中にある神的なものである……

教智はすべて主なる神に由来する。

とあり、これを読むかぎりカルダーノは敬神 (pieta)、神学としての知、つまり神的教智の敬重を標榜している。知は人間の意志の訓練によるものではなく、神の恵み深い自発的な贈り物というわけである。

しかしこの場合の神とはいったい何をさすかは疑問の残るところである。十六世紀という時代を生き、かつ対抗宗教改革の波にもまれたカルダーノの思い描く神はもはや魂の昇揚としての彼岸の神ではあるまいし、当然キリスト教の神だけではないと思われる。当時の人びとに神に対する信仰は存在していたであろうが、心は教会に絶望してしだいに神から離れていき、もはや神によっては屈辱との闘いを解決するすべてを見出せなくなる。一部の知識人は、やがて科学と呼ばれる新しい神を予感するようになるのではないか。

カルダーノは確かに神の存在を信じていたようだが、個人的な魂の体験に由来するものではなくあくまで外的なものに派生した信仰であったという指摘もある。ここで外的なものとはおそらく神を崇拜するという慣習のようなもの、また肉体が虚弱であったことなどが考えられる。

カルダーノは神と教智については次のようにも書いている。

わたしはひとりになると、この二者「神と良き守護霊」を瞑想することにしていく。その一方は神の存在で、言い換えれば精神の善、永遠の教智、純粹な光の源泉でありその創造者、喪失されることのない心のうちなる真の喜び、真理の担い手、惜しみなく与えられる愛、造物主、人格化された至福、全聖人の守り手でありかつ渴望のまど、深遠で気高い正義、死者を見守り生者を忘れない存在のことである。他方は神の命によってわたしのもとへ送られてきた守り手であり、慈悲深く良き助言者となり、逆境にあってわたしを助け慰めてくれる。

神と人間を結ぶ媒介物的存在、それが守護霊 (spirites) であるようだが、次の文の運命の位置と比較されたい。

人間の教智は運命より力がまさっていると教えているが、われわれの日常経験からしてまったく反対だ。次の事実を考えてみればよい。運命はいつでもどこぞと想うところでは全貌をあらわし、全力を傾注するが、われわれはごくわずかばかりの教智しか持ち合わせていない。だから人間の教智に運命を打ち負かす力はないし、運命にくらべてはるかに人間の教智は勝ちめが少ない。運命は神の教智を前にするとたじたじとなり、その氣配を察し領分を侵すことになる。

とあって、神智・運命・人智という段階を設けている。この運命の役割を、カルダーノの側から見て意識的に果たしてくれるのがおそらく守護霊と命名されているものではないか。「人間のなかには動物性を越えたもの、感覚を越えたもの、つまり知性があって、この知性は外から突然人間にやってくるが、直接肉体とは結びつかず、介在物……靈的な介在物」が必要である」とカルダーノの人間観を考察したガレンの文章にもあるように、神智を直接受容するのではなく、ひと呼吸おいて受け入れている。その呼吸にあたるものが靈的介在物であり、おそらく守護霊なのであろう。そしてさらに、

もし自然現象としての錯誤は資料がもとで生じ、守護霊の誤りは意志にあると言う人があれば、わたしは守護霊が非資料的で、神に依拠する善なるもの、神学者の言う「善天使」であるので、神のみ心どおりに未来を忠実に指し示して、決して誤ることはないと思えよう。

自然のしくみは、守護霊から得たものをいつも正確に心に伝達するようになっていた。

とあり、つまり守護霊は神の使いで、自然は守護霊から得たものを正確に伝達するように仕込まれているのだから、その伝達が周到になされていたのなら、守護霊が神の化身のようになり、自然の中に神が宿っていることを意味しはしまいか。自然の中に神の教智が潜むということである。神 自然知という関係が把握される。

この自然知という概念はカルダーノの知の概念のもうひとつの側面と言えよう。

それからしばらくして、わたしはもうひとつの夢をみた。わたしの魂はこの偽りで孤独な世界から解放され、月の世界にあった。わたしが嘆息をもらしていると、父親の声が出てこう言った。

「わたしは神によっておまえを見守るため、おまえの許へ送られてきた。この地はおまえの目には見えない魂でいっぱいだ。同様にして、おまえの目にわたしの姿も見えない。ほかの魂に話しかけることさえおまえには許されていない。この天界に七〇〇年のあいだ、おまえは留まり、その後天の第八圏に辿り着くまで、それぞれの天圏に同じ年月留まることになるであろう。そして、最後に神の国におまえは到達するであろう」

さて、以下はわたしがこの夢に与えた解釈である。

人を守ってくれる父親の魂ほど親しみをおぼえ、くつろがせてくれるものはない。月というのは、文法学の象徴である。水星は幾何学と代数学を、金星は音楽、占星術、詩を、太陽は倫理学を、木星は自然学を、火星は医学を、土星は農業、植物学、技術を象徴化している。天の第八圏は、上記の全学問の集大成、自然の与える教智、その他もろもろの学問研究を代表している。やがては、わたしは万物を司る原理の中に休息を見出すことができるだろう。

これは天界の秩序に諸学問を位置づけたものだが、こうした発想は「自然の秩序立った動きの中に教智の表現を見て」おり「この教智は」「自然以外の何か、つまり天上の創造主にして自然の支配の教智」というルネサンス期の自然観を論じたコリンゲウツドの文章が説明してくれる。

自然の中に神が宿っているという考え方はルネサンス人に共通して見られるものであり、カルダーノも著『アルス・マグナ』において三次方程式を論じた箇所で見られる。彼に言わせると「一次は線、二次は平面、三次は立体（肉体）とし、四次以上は自然が許さない」となり、この自然とは神を示すことは言うまでもない。

以上神的教智と自然の教智について述べたが、カルダーノの言う神的教智とは、彼の宗教的情熱から見てもフイチーノが抱いたような目標とみなして上昇しうる神の教智ではないようだ。彼はむしろ守護霊とかいったような介在物に一層関心があったと思われる。

経験知 —— 第三の知の系譜・知識

カルダーノは『自伝』の冒頭を次のように書き出している。

人類が学んでもよいとされるあらゆることの中で、真実の知識を得るほどに愉しくて素晴らしいことは、ほかにないように思われる。

とあり、カルダーノの知識欲のほどが窺える。彼はまた自分の生まれた時代を指してこう言っている。

どうしてわたしは、地球全体のペールが次第に取り去られてゆくこの世紀に生まれあわせたのであろう。…
…当代こそは探検の時代である。¹⁰¹

話題を今世紀の発明に移すと、黒色火薬の製造ほど素晴らしいものはない。…また一言も羅針盤に触れず
にすまずつもりはない。…第四番目に、活版印刷の発明に言及しよう。人間の手のなせるわざ人智の所産と
して、それは神の奇跡に対抗するものにちがいない。¹⁰²

この引用を読む限りカルダーノが当時の科学技術の進歩に明確な意識を持っていたことがわかり、叙述にも具
体性がみうけられる。この具体性および客観性は『身体つきについて』『健康について』『肉体の鍛練につい
て』『食生活について』の章を見れば一目瞭然であり、カルダーノが確固たる観察眼を持っていたことが了解で
きる。カルダーノはこの観察ということに最大の関心を寄せていたと思われる。

第四十七章『わたしの守護霊』において彼は知識を分類している。

知識は三種類に分けられる。第一のものは、感覚に由来するもので、たくさん的事物を観察することによっ
て得られる。下層民や無教養な人がわたしに備わっていると賞賛するものだ。…

第二は、一定の方法に則り原因を究明してはじめて得られる高度なものと知識である。証明と呼ばれる
認識がそれで、結果から原因が究明されるからだ。

第三は、もはや形を持たない不滅なものに関する知識である。すべては守護霊の司るところとなる。¹⁰³

まとめてみると第一の知識は観察による感性、第二は理性的知識、第三は洞察力ということになるうか。

この観察であるが、興味深いことに第二十三章『生活の規範』の中で取り上げられているのである。この章は
「生活の拠りどころとなる規則を守るほど有意義なことはない。」¹⁰⁴ではじまっているように、カルダーノが考えた
よく生きるための生活上の規律を番号で分類して述べたものである。その六番目に、

あらゆるものを観察することで、自然において何事も偶然には起こらないと思ったこと。そのため金勘定よ
りも、未知なる自然界の研究に情熱を注いだ。¹⁰⁵

とあり、日常生活のレベルにおいても学術面どうよう観察の重要性が説かれている。これは彼の専業である医
術の面でも顕われてくる。同章に八番目として、

さらに自分の技術、とくに治療を施す場合には知恵とか自信よりも経験に頼った。¹⁰⁶

この引用中の知恵は原語ではsapientiaが使われており、神教的教智を意味しているが、これを読むと医学
技術においてはもはや神教的教智は不要であることが判り、経験知による技術の推進が読み取れる。

そのほか数限りない発見をわたしは引き合いに出すこともできるが、特に次の点だけにしておこう。わたし
は自然界の事物についてなされてきた観想をどのように技術や仕事に応用すればよいかを教えた。そんな試み

は、わたしをおいてそれまで誰もしたことがなかった。

とあって魔術と科学の分類が定かでないことがあった当時、カルダーノの中の科学者の面が出ていて興味深い。しかしここに注意しなければならぬことがある。たとえば左記に挙げられる引用を読んでもらいたい。

異常とでも言えるわたしの性質が示されたのは、黒く長いちぢれ毛を生やして、ほとんど仮死状態で生まれたときにはじまる。といってもべつに驚くに値しないが、ともかく稀なことはたしかである。

さらに、

今までわたしは一個の人間として自分について語ってきた。天分においても教養という点でも、ときとしてわたしは他人に劣ってさえるということを示した。そこで今度はわたしの身に備わっているある驚くべき特異性について話してみよう。実際よほど驚異すべきものと見え、なにか自分でもわけの判らないものが身体に宿っていると思われるのである。いくら自分本来のものでないと言いつても、わたし自身の中には確かになにかがある。わたしがそうあってほしいと願っているときにその自覚があるのではなく、周囲が要求するときである。

カルダーノはさきの守護霊のときもそうであり、また第三十七章以下に登場してくる数々の超自然現象もそうなのだが、事象の正常性を観察叙述するのではなく、奇跡的で異常なことの叙述に眼目が置かれており、その異常性を批判的に分析するのではなく、一見つじつまのあう解説を施しながらむしろ優越感を抱いて叙述しているのである。これは科学的な態度とは言いがたく、科学者とは規定しがたい面と言えよう。ガリレオの書簡集などを読むとカルダーノのような異常性尊重の態度はいささかも見られず、正常平凡な内容を綴っている。

カルダーノはたしかに実験を強調し、また「催眠作用、または死者の怨霊に働きかける魔術」を排除し、「象徴としての文字を實際に用いたり、作って解読したりする一種の準学問」を拒否している点で近代科学に一步近いのだが、その天才的、巨人的態度や、奇蹟・超自然現象信用の態度という点からは科学者の名に適さない面が窺える。さらにカルダーノのあらゆる分野に寄せられた知識欲によって収集された知識は統一という方向には進まなかった。

カルダーノの態度は、方法的・体系的でありかつ社会的にも組織された共同研究である近代科学からは逸脱していたとは言え、魔術から科学への移行期に存在した人物として位置づけられよう。

矛盾の体現者

これまで便宜的に三つに分類してカルダーノの知というものを検討してきたが、ルネサンスという矛盾の多い時代の知を見事に体現した人物と言えるであろう。

カルダーノの生きた時代は政治的にはイタリア戦争やトルコの西進でイタリアは世紀末の様相を呈し、ペストに襲われて混乱の世相であった。世代意識も、たとえば父の時代の文化の反動として正反対の方に傾くといった二極的に単純に割り切れるものではなかった。宗教改革も開始されており、カルダーノにとっても自分の拠って立つところを求めるのが至難であったと思われる。

彼の知の様相がこのように多種に渡っているのは結局多種に至らなければ精神的に確実性を得なかったためと思われる。

「人間にとってこの上ない悦びと幸福は、天の深い秘密を知ること、自然の奥底にある神秘、神的精神、世界秩序を壊しあてることにある。」——彼の知識への渴望の強さを如実に表わしている言葉である。もはや天に自分を委ねることもできず、世相にも健やかな事態を見出せないカルダーノは、ただ知の探究に己を託して生きていったのだろう。ここに私たちは百科全書的人間の根源を見出さなければならぬ。と同時に生活に危機感を抱かざるをえない時代を生きた一知識人がなんとかして知と生活を時代の潮流の中で保たせていった生きざまを目のあたりにするのである。

3 知のメディア

黄金の知の世紀

十五世紀のフィレンツェで活躍した哲学者マルシーリオ・フィチーノは、同時代の著名な数学者にして天文学者パウル・ファン・ミデルビュルフに宛てた書簡の中で、十五世紀を次のように描いている。

黄金の今世紀は、ほとんど影をひそめてしまっていた自由七学芸や、文法、詩、雄弁術、彫刻、建築、音楽、オルペウス風叙情詩の古代的響きに、ふたたび光をもたらしました……親愛なるパオロ（パウル）よ、貴方は天文学を完成させました。フィレンツェではプラトンの教智に光がさしこみました。ドイツでは書物が印刷されるための機械が発明されました。

（傍点 — 訳者澤井）

フィチーノはここでみずから生きて活躍した時代を、△黄金の世紀▽、つまり△黄金の知の世紀▽として定義づけ、諸学芸の復興は言うに及ばず、彼がその著作の翻訳に力を尽くしたプラトン哲学の勝利や天文学の進歩を挙げ、最後に印刷術（活版印刷）の発明を忘れずに掲げている。彼が△印刷▽をこうして連ねたことは、△黄金の知の世紀▽という言葉に集約される十五世紀にとって、△印刷術▽の発明発展が必要不可欠な要素であることを明言していると言えよう。

このフィレンツェ・プラトン主義の巨頭が脳裡に想い描いた知にはキリスト教的な知のみならず、ヘルメス思想、新プラトン主義の理念など魔術の知の系譜に属するものも当然含まれていたことであろう（フィチーノの哲学思想したい、キリスト教思想の枯渇を魔術の知を取り入れ、両者を折衷させることで救わんとしたものである）。そうした無形の、理念としての知が、△形▽を宿した精神文化として、知識人はじめ一般の人たちに広がっていくためには、活版印刷の普及に如くものはなかったにちがいない。

なるほど文化を精神的な産物として規定してもよいかもしれないが、それを補充してくれる媒体として印字された書物のもつ物質性もけつしてなおざりにできるものではなからう。フィチーノの慧眼はこの事実を見抜いていたのである。彼はプラトン『饗宴』の注釈書を書くが、この中で扱われた愛の理論、いわゆる△プラトニック・ラヴ▽は印刷による書物の普及がなかったならば、著者の死後もあれほど流布はしなかった。ピエートロ・ベッポ、カステイリオネ、レオーネ・エブレオなど十六世紀に活躍した当代一流の著述家の愛の理論はすべてと言ってよいほど、フィチーノの愛の理念を基調としていたからである。

かりに手写本の時代がいぜんとしてつづいていたのならば、たとえ愛の理念は語り継がれていたにせよ、普及のペースはまさに「遅々として」という副詞がびったりとあてはまっていたはずである。活版印刷の実用化は人びと（それもあらゆる階層の人びと）に印刷本を供給するとともに、知的発見、意思疎通、思想や学知の伝播拡充にこれまでにないほどの速度を加えたことになる。その具体例がフィチーノの△プラトニック・ラヴ▽の普及なのだが、この注釈書はラテン語で書かれており、俗語に翻訳されてさらに多くの読者を得たことと思う。